第10回全国自給飼料生産コンクール受賞名および氏名

［農林水産大臣賞］

（飼料生産部門、飼料生産組織） ※各数値はR4年度のもの

<table>
<tr><td rowspan="2">出品者氏名</td><td rowspan="2">県名</td><td colspan="2">出品財（飼料作物）</td><td colspan="3">飼料作物の単収(kg/10a)</td><td rowspan="2">TMR供給戸数</td><td colspan="3">労働力</td></tr>
<tr><td>栽培品種</td><td>実面積(ha)</td><td colspan="3">稲WCS</td><td>男</td><td>女</td><td>雇用</td></tr>
<tr><td rowspan="4">広島県酪農業協同組合
（みわTMRセンター）</td><td rowspan="4">広島県</td><td rowspan="2">稲WCS</td><td rowspan="2">144.2</td><td colspan="3" rowspan="3">3,114
（広島県経営指標：3,000）</td><td>44戸</td><td>8人</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>TMR販売量
13779t</td><td rowspan="2">製造・保管・管理</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>計</td><td>144.2</td><td>粗飼料自給率：37.7%</td><td>TDN自給率：12.4%</td><td>TMR供給先平均乳量：9,307kg/頭・年</td><td colspan="3">TMR供給先平均乳脂率：4.00%</td></tr>
<tr><td>経営の概要</td><td colspan="10">広島県酪農業協同組合によって運営されるみわTMRセンターは、中山間地域の狭小な耕地で農業生産が行われている広島県において、WCS用イネを生産する耕種農家（集落営農法人）と酪農家との間で資源循環型耕畜連携システムを組織し、飼料自給率向上と地域の持続的な農業経営の展開を支える飼料生産・供給組織である。
2ヶ所に分散したTMRセンターを1ヶ所に統合し本格的な操業を開始した平成26年当初から、籾が少なく消化性の高い極短穂型WCS用イネ品種に注目し、① 継続した栽培・給与技術研修会、刈取業者を対象にした収穫技術研修会の実施、② 極短穂型品種WCS用イネ「たちあやか」「たちすずか」「つきすずか」への栽培品種の集約、③ 栽培暦（栽培時期、施肥管理）による統一的な指導、④ 栄養的に均一なWCS用イネの安定した生産、⑤ WCS用イネを用いた栄養的に斉一なTMRの調製と供給、⑥ 乳牛への給与メニューによる飼養管理の平準化、⑦ 生産された良質堆肥の耕種農家への還元等の好循環の形成などにより、有機的な耕畜連携に基づく中山間地域の条件に適した生乳生産体制を構築している。
本事例は、酪農サイドからの働きかけによって、地域全体で高品質な乳牛用イネWCSの生産・利用体系の確立に成功したものであり、WCS用イネ利用のメリットをユーザーである酪農家が強く認識し、関係者で共有したことが耕種生産者のモチベーションに、さらには資源循環系の強化にもつながっている。耕畜連携の要点は、関係者がプロジェクトの意義を理解し、情報共有を徹底することにあることを示す成功事例といえる。
当初20haから始まったWCS用イネの契約栽培面積は、令和4年には広島県内のおよそ1/4である144ha、生産量は4,490tに達しており、現在も急増している。TMR製造は発酵飼料を中心に、各乳期に対応した種類を用意して利用農家が活用しやすい価格・供給体制を整え（主力TMRは48円/原物kg、乾物率50%、県内均一料金）、これを組合員のおよそ半数の44戸が利用している。また、高品質のTMRは夏季の暑熱時にも食い込む嗜好性が良いものとして酪農家の高い評価を得ている。
乳牛用飼料として有効なWCS用イネに着目し、集落営農組織への啓発と播種から栽培収穫までの一連の作業体系を構築し、TMRセンターを核とした酪農経営への供給体制を確立したみわTMRセンターの取り組みは、持続的な地域農業を視野に入れた有機的な耕畜連携の在り方を提示し、酪農産業の新たな方向性を示すモデルである。</td></tr>
</table>

［農林水産省畜産局長賞］
（放牧部門、酪農経営） ※各数値はR4年度のもの

<table>
<tr><th rowspan="2">出品者氏名</th><th rowspan="2">県名</th><th colspan="2">出品財（放牧）</th><th colspan="5">家畜飼養頭数（年平均頭数）</th><th colspan="3">飼料作物作付面積（ha）</th><th rowspan="2">労働力
（人）</th><th rowspan="2">平均分
娩間隔</th><th rowspan="2">平均産次</th></tr>
<tr><th>草種</th><th>実面積(ha)</th><th>品種名</th><th>成牛</th><th>育成牛</th><th>子牛</th><th>計</th><th>採草地</th><th>放牧地</th><th>計</th></tr>
<tr><td rowspan="4">忠類農業協同組合放牧酪農牛乳生産グループ</td><td rowspan="4">北海道</td><td>オーチャードグラス、チモシー、ペレニアルライグラス、メドウフェスク、ケンタッキーブルーグラス、シロクローバ</td><td>12.0
～
44.0</td><td>ホルスタイン</td><td>40
～
53</td><td>17
～
26</td><td>0
～
10</td><td>66
～
85</td><td>20
～
35.9</td><td>12
～
25.2</td><td>40
～
75.3</td><td>家族経営
2
～
4</td><td>ヵ月
14
～
15.3</td><td>（産）
2.5
～
3.3</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td colspan="2">経産牛1頭当産乳量</td><td colspan="2">乳脂率</td><td colspan="2">乳飼比</td><td>粗飼料自給率</td><td>（土地利用率）</td><td rowspan="2"></td><td>TDN自給率</td><td>年間乳量
（t）</td></tr>
<tr><td>計</td><td>130.4</td><td colspan="2">6,600～
7,770 kg</td><td colspan="2">4.0～
4.17 %</td><td colspan="2">15～30.5</td><td>100%</td><td>100%</td><td>60～
75%</td><td>310～
382</td></tr>
</table>

経営の概要	忠類農業協同組合放牧酪農牛乳生産グループは、JA忠類管内の放牧酪農家8戸のうち5戸が10年前よりグループとしてNon-GM飼料による放牧酪農牛乳生産に取り組み、よつ葉乳業にて加工を行い都府県の「よつ葉会」の会員に産直方式でこれを提供している。この取り組みは「よつ葉会」の会員からの強い要請によるもので、日本草地畜産種子協会の放牧畜産実践牧場の認証を受けると同時によつ葉乳業は放牧酪農牛乳生産基準認証を受けて行っている。公的機関によって認められた我が国で最初の放牧酪農牛乳である。放牧生産の一定の基準を満たし、さらにアニマルウェルフェア基準も満たしたものでもあり、放牧牛乳生産の先駆的取組として高く評価される。 5戸の酪農家は、労働力（1.7～3人）、経産牛頭数（40～53頭）、圃場面積（43～69ha、うち放牧地12～42ha）と農場間に違いがあるが、共通技術として年間放牧日数を185～210日と長く確保した集約放牧によって粗飼料自給率100%はもちろんのこと、飼料TDN自給率も60%～75%を達成している。経産牛1頭あたり年間所得30万円前後、所得率30%前後を確保し、乳飼比は15～30%と低い値となっている。また、放牧によって牛舎内での作業が抑えられる飼養管理は、労働にゆとりを生み出している。 放牧技術の研鑽や地域活動は地域の放牧研究会（8戸）として行なっており、放牧研究会が新規参入予定者をヘルパーとして雇用するなど地域の担い手確保・育成にも積極的に取組んでいる。また、よつ葉会との定期的な交流の中で、消費者と生産者が直接顔の見える関係ができあがり、生産物に対する消費者の支持を手応えに、将来の目標としてさらに飼料自給率を高めることが掲げられている。 さらに、アニマルウェルフェアに対する配慮を行いながら、高所得率を達成する、省力的で低コストの資源循環型の酪農経営を実践している。生産者にゆとりをもたらし、家畜にやさしく、環境負荷も少ない、SDGsが求められる時代に相応しい持続性に優れた経営であり、また、乳業メーカーや地元JAの協力もあって、地域の活性化にも大いに貢献している。

［農林水産省畜産局長賞］
（飼料生産部門、飼料生産組織） ※各数値はR4年度のもの

<table>
<tr><th rowspan="2">出品者氏名</th><th rowspan="2">県名</th><th colspan="2">出品財（飼料作物）</th><th rowspan="2">受託農家戸数</th><th colspan="3">飼料作物の単収(kg/10a)</th><th colspan="3">労働力</th></tr>
<tr><th>栽培品種</th><th>実面積(ha)</th><th colspan="3">牧草（チモシー）</th><th>男</th><th>女</th><th>雇用</th></tr>
<tr><td rowspan="3">苗代ロールベーラー組合</td><td rowspan="3">岡山県</td><td>牧草（チモシー）</td><td>89.1</td><td>畜産農家 3戸</td><td colspan="3" rowspan="3">1,377</td><td>5 人</td><td>3人</td><td>2人</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>畜産農家以外 0戸</td><td>集草、梱包、運搬、ラップ</td><td>運搬</td><td>集草、運搬</td></tr>
<tr><td>計</td><td>89.1</td><td>合計 3戸</td></tr>
<tr><td>経営の概要</td><td colspan="10">苗代ロールベーラー組合は、岡山県蒜山地域の3世代、50年以上の歴史を有する酪農家3戸で構成する共同飼料生産組織で、約90haの自給飼料基盤を活かした高品質のチモシー生産に取り組み、それぞれが個性あふれる経営を展開している。大型機械の共同利用による経費削減や効率化の効果を発揮させるため、集草以降の作業を共同作業として女性を含めた明確な役割分担の下で実施し、公平性・透明性の高い組織運営を行っている。自給飼料の生産コストはTDN1kg当たり55.9円で、都府県平均のほぼ半分、地域で流通している輸入乾牧草の1/4程度に抑えた低コスト生産を実現している。先進技術の導入に積極的で、昭和61年には地域の農家に先立ってロールベール体系を導入するなど、地域の模範となる生産団体である。
3戸の酪農家は、たい肥散布、播種、鎮圧、刈取・反転までを個々の農家で行い、集草、梱包、運搬、ラッピングを共同で行っている。レーキ、ロールベーラー及びラッピングマシン等の農作業機械の共同利用により、労働時間の削減と自給飼料生産コストの低減が図られている。料金体系については、3戸の協議の元でネット、ロール代、人件費、機械使用料などを算出して設定する明確なものとしている。また、毎日の作業後にはミーティングを行い、ロール個数の確認やその日の作業の反省、今後の作業の予定を話し合うなど密に情報交換を行っており、これらにより相互の信頼関係の構築や個々の草地管理技術の向上が図られるとともに、相互扶助の関係形成にも役立っている。
蒜山の冷涼な気候を活かして取り組んでいるチモシーは極早生種の「クンプウ」、「ユウセイ」であり、年3回刈りで、地域平均以上の収量を確保している。また、草地更新を3～5年ごとに徹底すると同時に草地更新年の減収が最小限となるように工夫することで収量・品質の安定化を図っている。さらに、他経営からの作業も受託しており、地域の耕種経営との連携を強め、自給飼料基盤の確保に努めている。
飼養する乳牛品種、飼養規模等の違いから、構成員の経営スタイルはそれぞれ大きく異なるものとなっているものの、基本となる自給飼料生産重視による経営の優位性は共通して認められており、収穫・調製作業の共同化による効果的な飼料生産モデルとして評価される。</td></tr>
</table>